
君と過ごした日々

未来予想図

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と過ごした日々

【Nコード】

N0970E

【作者名】

未来予想図

【あらすじ】

優貴と緑のラブストーリー。遠距離での別れ。そして10年後の運命的な出会い。そして親の強制結婚。結末は必ず泣けます。興味のある人はぜひ呼んでください♪

優貴：本当にありがとう。あなたにはすごくすごく迷惑かけた。傷付けた。不安にさせた。自分勝手にごめんね。

小学1年生から出会ってあなたに恋に落ちた私。

小学2年生になって私たちはもう両思いだったみたい。何て期待してた。

でも小学5年生になってから私たちは少しずつ、でも確実に離れていったんだ。

小学5年生

『やったー！！また綾と同じクラスだー！！』

『ほんと。やったよねー！！……あっ！！優貴もじゃん！！』

『へえー…そうなんだー！！』

『てか、何だかんだ言ってさ優貴と緑って運命の赤い糸で結ばれてたりして…』

『んな訳ないじゃん。今までは…うん…偶然だよっ!!』

『まあ頑張れよ!!』

『綾もだよっ!!』

私は席についた。

隣は…大樹？

もしかして神楽大樹君??

神楽大聖君とは…はつきり言うとかかなりヤンキー…？

何ていうか…小学5年生なのにチャラチャラしてて、でも強くてスポーツが出来るから女子にはかなりモテるみたい。まあ私には全く興味ないけどね。

授業中…

『あのさ…お前好きな人いるの?』

『キャッ!!』

神楽君の言った事に驚いて私はおもわず叫んでしまった。
担任もビックリしたのか…

『大丈夫か？錦戸。』

と慌てて声をかける。

『何でもないです。すいませんでした。。』

私は慌てて席に着く。

神楽君はまだ笑っている。

『ちよつと？あんたのせいだからね？』

『何で人のせいにするんだって。』

『最低。。。』

『冗談だって！！ごめんな』

『えっ？』

神楽大樹君つてもつと冷たい感じのヤツじゃないの？
何かかな〜り優しい気がする。。気のせいかな？

そんな事を考えながら神楽大樹君と話していた。

私をずっと見てる人がいたともしらずに…

『アンタさ』

『え？』

『神楽大樹と仲良くしすぎだって…』

『そうかな？』

『優貴なんかめちゃくちゃ睨んでたよ？』

『え…マジで。。。』

『マジだって！！やっぱりアイツ好きなんだよ。』

『誰を？』

『緑に決まってるじゃん！！！！』

『え？私？』

『そうだよ。本当、緑は鈍感すぎ！！』

『ごめんなさい…』

『でもさ、アイツはすごいよねー！！』

『何で？』

『だって2年生からずっと一筋だから！！』

『…』

『そろそろ告白されるんじゃない？』

『はっ？んな訳ないじゃん。』

『あるでしょー！！その可能性は。十分に。』

『だって…』

『まあ頑張れよー!!』

『もう綾、冷たすぎだよ…：他人事だと思って…』

『錦戸!!』

声がしたほうを振り向いた。

『神楽…』

『何かあったか?』

『ううん。平気〜!!何でもないよ?何?』

『あのさ〜前にも聞いたけど、お前は好きな人とかいたりするの?ほら何度か噂になったじゃん。』

『それは…』

『それは、何？』

『いないよ。』

『え？あつ、そうなんだ。』

『う…うん。いない。』

『分かった〜！！じゃあな！！』

『うん。』

私は後悔した。

あの時、ちゃんといるって言うていればこんなに遠回りする事もなかったのに…。しかもそれを優貴は聞いていたのだった。

林間学校。5年生の楽しみだっ♪

でも私は不安だった。

あんな事を口走って良かったのだろうか。

私が優貴が好きなんだって言えば良かったのだろうか。。。

そして林間学校当日…

『緑〜!!』

『綾!!』

『いよいよじゃん!!』

『そうだね』

『まあ肝試しはきつと神楽大樹が優貴に決まりだな。緑は。』

『何で?』

『女の勘だよ』

『何それ〜!! (笑)』

そして瞬く間に時間は過ぎた。
1日目の夜…

『緑ってモテるよね〜!!』

『え〜? そうかな?』

『絶対、そう！！だってあのモテる男二人に好かれてるんだからさ！！』

『え？』

『知らないの？神楽クンと優貴クンってどっちともモテるの。んで二人が緑の取り合い争奪戦らしき事をやってるんだって』

『私も聞いた事ある！！』

みんな口々に言う。

そんな訳ないよ…

『とにかく明日は二人、特に気合い入れてるんじゃないかな？』

『どっちか緑と組むか。きっと燃えてるだろうね。』

そんな感じで1日目の夜は終わった。。。

そしていよいよ運命の2日目。

山登りやなんやらして疲れてるのに肝試しやるって…しかも樹海で。
私はめちゃくちゃこついうのが嫌いな訳で…

『錦戸と組むのは神楽…と井上だ!!』

『え…?』

予想外…大樹君と優貴?信じられない。

『…』

やっと私たちの番が来てみたものの…歩いててもずっと沈黙。

私はこの沈黙に耐えられなくなった。

『何でこんなに静かなの…?つまらないよ…』

『ごめんな』

大樹君と優貴がハモった。(笑)つついっ私に吹き出してしまった。

『何で笑うの？』
優貴が呟いた。

『いや、二人の態度の変化が…（笑）』

結局、私は笑いっぱなし。二人はその後も睨みあってたみたいだった。
ちよつと複雑な感じだった。

『緑〜！！肝試しどうだった？』

『うん…ビミョーかな…』

『何よ！！ビミョーって！！』

『うん。本当だよな。』

『何で変わろうとしないのかな〜！本当に馬鹿で鈍感すぎるよ！』
で、感じで綾には朝まで説教された。。。

『もう〜…綾のせいで寝不足だよ〜…』

『緑が悪いんじゃない!』

『だって…』

結局、林間学校は良く分らないまま終わった。

そして、そろそろ夏も終わろうとしていた…

『皆で祭り行かない?』

綾が提案した。

そして綾と私と由利と亜紀。男子は由利の彼氏、亜紀の彼氏、そして優貴と大樹。

もう私は林間学校の後から神楽じゃなくて大樹と呼ぶようになっていた。

祭り当日…

『お母さん!!浴衣は?』

『そこに出してある!』

『はいはい…』

お母さんに着せてもらい髪型もアップに整えた。

そして集合場所に向かった。

『皆…!!』

『あつ!!緑、浴衣じゃ〜ん!!可愛い』

『そう?ありがとう』

『ねえ、神楽も優貴も何か言ったらどうなの?綾が喝を入れた。』

『…』

二人は黙っている。

『何だよ、神楽も優貴も空気読めよ』
皆、口々に言う。

『可愛い…』

そう言ったのは大樹だった。

『そうかな？でもありがとっ
っ』

『やっぱり神楽と緑はお似合いだな』

私は正直、優貴に言われたかった。

『可愛いよ』って一言でいいから言っただけだった。ちょっとふてくされた。

『まあともかく、花火見よっ？』

『うん！』

そしていいトコを確保した。でも座る順、めちやくちや変じゃない？

由利↓大樹↓亜紀↓由利の彼氏↓綾↓亜紀の彼氏↓私↓優貴
めちやくちやビミョー…←

でも花火はめちやくちや楽しめた。

『キレっ…』

『そうだな。』

隣から声がした。

優貴が。優樹が今日、初めて声をかけてくれた。

『うん』

私たちは思いきり花火を楽しんだ。

そして帰り道…

私は綾と優貴と大樹と帰った。

『じゃあね〜!!』

『うん。おやすみ、花菜。』

そして私は家に入ろうとした。その時、走ってくる人が見えた。

その人は…

『大樹…?』

『錦戸…』

大樹は息を切らしている。

『どうしたの…？』

『あんな…俺。。。』

『俺、お前が好きだ。』

『えっ…？』

『ずっと好きだった。アイツよりは好きになるのが遅かったけど好きな気持ち、アイツには負けない。だから覚悟しとけよ？』

『え…ちょっと…』

そして…キスが出来る距離まで顔を近付けてきた。
私は怖くなった。

優貴…

優貴、助けて…！！

『おいっ！！神楽！！』

『井上…』神楽は顔を離した。

『俺の女に何してる。』

『は…？』

『キスしようとしてたじゃないかよっ！！ふざけるなっ！！俺の女に手を出すな…』

初めて優樹を怖いって思った。いつもみたいに明るい声じゃなかった。

低くて怖かった。

『緑を諦めてたまるかよ。』

『は…？』

『俺だって錦戸が好きだからお前なんか譲ってたまるかよ。正々堂々勝負しろやっ！！』

『ああ〜いいぜ。受けてやろっじゃねえか。』

かなり怖いんですけど…

でもあの祭りの日からまた優貴が冷たくなった。
寂しくなった。

そんな時声をかけてくれたのは…大樹と金子だった。
正直に大樹には言った。

『私、優貴が好きなの。』

『やっぱりな…』

『え?』

『初めから分ってたよ。ジャマしてごめんな。』

『うつん。でも嬉しかったよ。ありがとう。』

だから、大樹は諦めたようだった。でも友達としてそばにいてくれた。その心遣いが嬉しかった。

そして金子…金子俊。
私は最初は大嫌いだった。でも今になっていい奴なんだなって思った。

『り…緑…!!』

『えっ？あつ、ごめん。。。』

『何で金子の方ばかり見てるの？』

『えっ？そうかな？』

『絶対、そうだよっ！！で何々？いつの間に…？』

『え…別に何も無いって!!』

と言いつつも気にしてる私がいた。

何なのよ…優貴の時の感情と似てる…。

私は少し不安になった。

そんな気持ちの中、私たちは6年生になった。

小学6年生

でも6年生になったらその感情も次第に消えていったため私は少し安心した。

そんな時、綾が言った。

『そろそろ優貴も限界だろうな』

『えっ…何が？』

『アンタって本当にバカだよっ!!』

『うーん…』

『緑に対する気持ち抑えるのも限界なんじゃないの？って事。』

『んな事、あるはずないじゃん。』

でもまさか綾の言ってた事が現実になるとは思わなかった…

『明日は運動会だ〜!!』

はあ〜

何なのよあの気合い入った担任は…あんな熱血は小さい1年生と遊んでればいいのに…←←
私のテンションは下がりがくり…そしていつの間にか私は眠ってしまった。

少しして私は目をさました。

『と言う訳で準備係は錦戸と井上、頼むな。』

『えっ!!ちょっと待ってください!!私ですか…?』

『当たり前だろう、クラスに錦戸は2人もいないしな。』

『どうしてですか…』

『お前ら、2人揃って寝息たてて寝てたからな(笑)』

うげ〜…最悪。

優貴の方を見た。

目があった。ドキツとして目を逸らした。

でもいつもみたいに簡単に優貴は目を逸らさなかった。

『もしかしたら今日、告白されたりして…？』

そう言った綾の言葉は当たるのか…？と疑問になった。

『おい、錦戸！！』

『えっ…？何？』

『井上がお前を呼んでるんだよ…って錦戸？』

私は逃げた。優貴に呼ばれてたのに。

私は最悪だな…

優貴の事、好きなのに素直になれないなんてね…（汗）

汗が涙に変わった。

私は泣いた。素直になれない自分が悔しくてたまらなかった。

何でだろ…（涙）

『プルプル…』

電話の音が鳴った。

優貴専用のメロディ。私はこのメロディが鳴るのを待っていたのに。
。今じゃ出る気も起きない。

私は二回も出なかった。

涙が止まらなかった。

誰かにこの想いを伝えたかった。

そして由利に電話をした。

『もしもし？緑？ってどうしたの？もしかして泣いてる？』

『私、優樹の事拒否っちゃった。逃げちゃった。電話も無視しちゃった。どうしよう…（涙）』

『そんな泣かないの！！アンタは受け入れるのが怖いんだけなんじゃないの？』

『え？』

『ずっと好きだったから受け入れるのが怖いんだよ。好きすぎて。』

『そっなのかな？』

『うんっ！！きっとそうだよ。』

由利のおかげで勇気が出た。私から告白しよう。
受け入れてくれるかやっぱり心配だけど…（汗）

そして運動会当日…

私たちは何とか大役を終えた。

正直…

『ウザイ！！』

『何で？』

『おかしいでしょ？何でここだけひなたな訳？肌が焼ける。』

『まだ小学生だったの。』

『…っ、いいの！！ともかくここイヤ！！』

『本当、ワガママ。（汗）』

そんなこんなで運動会は終わった。

帰り…

私は告白を自分からする事を忘れていた。そんなとき…

『錦戸っ』

『あっ!!優貴…』

『話ある。』

『いいよ。何?』

『えっと・・・好きです』

『え・・・?』

てか唐突すぎっ！！（笑）
私は笑いたかったけど一生懸命おさえた。

『私も好きです。』

そういうと私はもう走り出していた。
優貴のもう一言を聞かずに。

『何それ…』

『ごめんなさい...』

『本当、逃げ出して来るなんて...』

『それは...反省します。』

『当たり前じゃん!!』

綾にまた喝を入れられた。

『でも私も好きですって言ったし!!...』

『それは両想いになっただけじゃん。付き合うまではいってない。』

『だからそれは反省してますって!!...』

『じゃ自分から付き合って下さいって言え!!...』

『無理...!!...』

『無理でもやるのっ!!...』

『…っ』

でもまた先を越されてしまった。

その3日後…

『彼女になってください。』

『はい。』

そしてまた…

『アンタって本当に馬鹿!!』

『ごめんなさい、私から言おうとは思ってたけど…』

『違っっ!!はい。じゃなくてよろしく願いしますでしゅ!!』

『そうだね…』

『本当、緑は馬鹿!!』

『ごめんなさい...』

『まあ可愛いからOKにしとく。』

『ありがとう!!』

そして私と優貴は付き合ってたのですが...

付き合ってる実感はなし!! (汗)
何たって声もかけてくれないし...私は自覚がなくなってしまった
ほど。
そんな時だった。

『プルルル...』

知らない番号だった。

『もしもし?』

『よっ!!緑っ!!』

『えっ…何で？』

『俺だよ！！大地！！』

『どうして…？』

『ダチから聞いた。』

『そうなの…突然だね…』

『じゃ登録よろしくな。』

『えっ、あっうん。』

『じゃまた後でかける。』

『うん。』

何で…？何で大地から電話来たのかな？
優貴に伝えるべきかな？

…うん。
いいよね。優貴は私と付き合っても何も変化ないもの。だからこれくらいなら平気だよね…

『プルルル…』

また…？

『もしもし…』

『あつ、緑？』

『他に誰が出るのよ。全く。』

『そりゃそうか。（笑）』

そして他愛のない話を少しした。
そして大地は突然話を変えた。

『お前、好きな人いるか？』

『えっ…』

言うべきか言わないべきか…
いや、言わなくていいや。

『いないよ。』

『そうなんだ。』

『うん。』

『じゃあさ…今度、お前の家に行っていいか…？』

『えっ…家はちょっと…』

『じゃ家の前でもいい。話したいだけだから。直接な。』

『あっ、うん。分かった。』

『じゃあな〜』

そして電話を切った。

優貴とはメアドも交換してない。電話もないし…
もうイヤだ…辛いよ。

『アンタはどうしたいの？』
綾が切り出した。

『うっん…優貴と仲良くなりたい。もっともっと。』

『ともかく大地の事は優貴に言うべきだよっ!!』
もちろん、綾は幼なじみだから大地の存在を知っている。

大地…梅沢大地。

私の初恋相手だ。でも…卒園してから縁はなくなった。
だから忘れていた。
大地の存在。

『プルプル…』

『まただっ…』

『あっ、もしもし?緑っ!今から行っている?』

『えっ、あっちょっと!』

『じゃ後でっ!』

どうしよう…!今からかよっ!…!うわっ優貴にはバレないよね…

何て考えてるともう大地はいた。

『緑…？』

『えっ？ああごめんね。で、何？話したい事って。』

『あの子…』

『今からごめんな。でも今までずっと自分にウソついてた。でも…』

好きなんだよ。
♡

『えっ…でもどうして…?』

『理由は分からないよ。でもただ好きなんだ。お前さ、好きな人いないっていったよな? だからチャンスかなあって…』

『付き合ってくれないか?』

私は答えに迷った。

優貴を裏切る事なんか出来ないから…だから断ろうとした。

『私は…っ』

口を塞がれた。

『待ってっ!! 止め…っ』

口を離してくれない。

『止めてよっ…』

涙が出てきた。

どんどん溢れてくる。

『何でこんな事するの…？』

『好きだから。おとなしくしてろ。』

一気にトーンが下がった寛樹に驚いた。
そしてまた口を塞がれた。

『優貴…助けてっ！…！』

『誰も助けにはっ…』

バコッ

大地が殴られていた。
振り返ると…

『優貴…』

『何やってんだよっ！！俺の女だよっ！！手出すな。』

大地はどこかに行ってしまった。

『ごめんね、優貴。』

『そばにいるよ…』

『えっ？』

『そばにいるよ。ずっと。』

『うん。』

『アイツに何された？』

『えっと…キスされた。』

『じゃあ…』

『えっ…あっちよつと…！』

『何?』

『何するつもり?』

『キス…ダメ?』

『恥ずかしい…』

『俺も。』

『えっ…っ』

ああ今日は色々ありすぎだよ ←
でも幸せだったかも (^^) ←

翌日…

優貴との仲は深まり私はすごく浮かれていた。
でも新しいライバルが現れるのだった。
この時はライバルが現れるなんて思わなかった。

『優貴！！』

『何？』

『ちょっと待ってよー！！』

そんな感じの会話が聞こえた。私が会話のする方を振り向くと、優貴と女の子が話している。

『あの子、絶対優樹君狙いだよっ！！』

『ええ〜話してるだけじゃん？』

『嫉妬かしないの？錦戸。』

金子が口をはさんできた。

『うん。しないな〜私。』

『いの〜…』

『えっ…』

『バカやろー!!』

綾のけりが私の腹を直撃。私は倒れた。

『何するのー!!』

『アンタがいけないんでしょ？嫉妬はしなくてもするのー!!』

『訳、分からないしー!!』

『十分、分かるわよっ!!』

『だって話してるだけじゃん。なのにいちいち何言ってるの?』

『普通にさ、キレるよ。彼女なら。優貴とアイツがめちゃくちや仲良さげに話してる。嫉妬しないアンタがバカだよ。』

『うっん…分からない。』

『おいつ、綾。もういいだろ。』

『そりゃそうよね。』

『俺が教えてやるよ、嫉妬の意味とか。』

『どういこと?』

『ちよつと緑借りるよー!!』

大声で金子が叫んだ。

もちろん、優貴も気づいてしまっただろう。

そして私は金子にお姫様抱っこされた。

『ええー!!ちよつと!!』

『いいから!!』

金子がつれてきたのは学校の屋上。

私はゆっくり金子の腕から離れた。

『アイツとあの女の子さ…幼なじみらしいんだよね。』

『そうだったんだ。』

『あの子、優貴に本気らしいんだ。緑には負けないって。優貴はその気持ちに気づいてないくらい鈍感なだけだと思うんだよね。』

『うん。』

『お前もこんなに鈍感だから…とられるぞ。いつか絶対に。』

『そうなんだ。』

『綾がそう言った理由、分かったか？』

『うん。もちろん。』

『少しは優貴の事、怒ったりしてもいいんだぞ。無理するなよ。』

『うん。金子…ありがとう。』

『じゃ戻るか？』

『ううん。戻らない。ここにいて。』

『…』

『金子…？』

『もう限界だよ。』

『えっ？金子…どうしたの？』

『アイツのためにお前の事諦めたのに…』

『…？』

『好きだったけど…優貴は大事な友達だから諦めたんだよ。でも…お前の気持ちを考えないアイツを今はムカついてたまらないよ。』

金子がそう言った途端、私は自然に涙が溢れてきて止まらなくなつた。

『おい、どうしたんだよ？』

『うっん。何か金子の気遣いが嬉しすぎて…』

『もういいんだって。だけどアイツ、マジム力つくんだけど…』

『もういいよ。私…』

『そこにいたのかよ。』

『優貴…』

『なんだ、二人で仲良く話してたのにジャマしてすいませんでした…。』

『ちよつと優貴…!!』

『なんだよ。』

『違うの。ちゃんと訳があるの…』

『は？二人で仲良くしてたじゃねえかよ!!』

パシッ……！！

優貴をひっぱたいた。

『私は…相談してたの！！金子に。優貴、アンタの事で！！私がど
んだけ悩んでると思うてんのよ！！意味分らない。なのに何なの
よ！！人の話くらい聞ける人になりなよ！！』

私はそう言っ て屋上を泣きながら去った。

『アイツさ…』

『アイツ、泣いてたな。』

『まあな。』

『俺は何かしたか？』

『したんじゃない？』

『分からないわ。何した？』

『自分で考えろよ。でも錦戸、めちゃくちゃ悩んでるんだよ。泣いて泣いて辛い思いしてるって考えてやれよ。』

『おう。分かった。』

『今度、泣かしたら許さないからな。』

『えっ？』

『錦戸は…多分、中庭のトコにいるから。行ってやれよじゃないと俺が行くよ？』

『分かった。サンキューな、金子。』

『おう。分かった。』

『グスッ…』

何なのよ。アイツ…

『おい！！緑！！』

えっ…？

私は恐る恐る振り向いた。

『優貴…？』

優貴は私を抱き締めた。

驚いた。初めてののような気がする。

『ごめんな、誤解させるような事して。』

『えっ…？誤解？』

『俺さ…プレゼントとか女の子が欲しいもんわからなかったからアイツに聞いてただけ。しかも、アイツには彼氏がいるから。』

『でも金子が…』

『脅しただけだよ。金子も色々あんだろ。』

『でもプレゼントって…？』

『目閉じて。』

『ん…分かった。』

チャリン…

『わあゝ…』

綺麗なネックレスだった。星形で高そうな感じがした。

『いいの？もらって。』

『いいよ。』

『ありがとうゝ、すごい嬉しい。』

『後…』

『今度、2人でどっか行こうな。』

『うん♪』

そして誤解だったって事で解決した。

『デートしょ?』

『…は?』

『何なの?大樹…だって私は…』

『錦戸、違っつて。ダブルデートしょ?錦戸、井上、俺と齋藤。』

『齋藤~~~~!!』

『何だよ、デカイ声出して。』

『だって彼女出来たなんて聞いてない!!』

『ああゝ…言ってなかったっけ?』

『ヒドッ!…!』

『まあまあ、井上と齋藤には言っただけから。詳しい事はメールが電話で知らせるよ。』

『了解。』

私は胸を踊らせた。
初めてのデートだ!!
早速綾に報告…

『綾…!!…!』

『おう、どした?』

『ダブルデートする事になった…!!…!』

『何それ！！詳しく教えなさいよ！！』

『まあかくしかじかつて事。』

『へえ〜…！！名一杯楽しんできなよ！！』

『うん♪』

こうして帰り道は、その話でおいに盛り上がってしまった。

『プルルル〜…』

『もしもし…？』

『大樹…！！何…？』

『ああ〜！！そうそう、泊まりになった。（笑）2部屋取れたから男女で別れるからな。』

『はあ〜？訳分からない…ちょっと待って！！私と優貴が同じ部屋

で…』

『一夜を共に過ごすの（笑）さっき、井上も同じ事言ってた。』

『信じられない…!!』

『でもアイツはいいってよ？ちなみに齋藤も。お前だけ却下しても無理だろうな』

『そんな…』

『日時は来週の土日。俺んトコの車が迎えに来るから。場所は秘密な？俺しか知らない（笑）』

『ヒドッ…!!』

何なのよ…!!

大樹は本当、遠慮？がないよな（汗）

そう考えてるうちに土曜日が来てしまったのだった。

『錦戸様』

『はい？』

『お迎えにあがりました。どうぞ』

『はあ…』

『お荷物をお預かりします。』

『えっ？あつはい。』

私は大きなトランクを渡して乗り込んだ。
大樹んトコは金持ちなんだな（笑）
てか、知らなかったわ（汗）

そして気が付くと大きなホテルが目の前に建っていた。

『スゲ…』

おもわず声に出してしまった。

『緑…！！』

『あつ、齋藤…!!』

『ここ大樹の別荘だつて!!』

『ええ…大樹んトコつて金持ちなんだね…私大樹にしとけば良かったかも…』

『ええ…?』

『冗談だつて!!あれ?優貴?』

『何…』

『どした?』

『もしかして…?』

『妬いてるわけじゃないぞ!!』

『うわっ!!めちゃくちゃ分かりやすっ(笑)』

『笑うな!!』』

『めちゃくちゃ可愛いわ』』

『可愛くないわ!!』』

『まあイチャつくのは部屋に着いたらって事でもう行こっ?』
齋藤が水をさした。

『うん!!』大樹はノリノリだ。(笑)
そしてホテルの入口に向かった。

『すごい!!』』

豪華なシャンデリア、レッドカーペット、そして床は大理石。目を
見張る大きな窓には雄大な景色が広がっている。
私は胸を踊らせた。

『俺たちの部屋あつちだから行こ?』』

『うん。。』』

正直、緊張してた。かなり。

だってまだ小学生なのに兄弟でもない男の子と一夜を共にするのですよ？

言ってることは変態っぽいですけど真面目に困るんですけど・・・
どうしよう。

『どうかした？』

『いえ？全然。それより・・・』

『どんだけ広いんだよってこと？』

『まあそれもありますけど・・・』

『何で敬語？』

『緊張しちゃって・・・』

『そう。』

『さっきはごめんね？からかっちゃって・・・』

『いや、気にしてないし。こっちもムキになってごめん。』

『うん。』

『ここみたいだよ？』

『なんか豪華だね・・・』

って言うか……

何でベッド一つだけ!?!?!?!?!?!?!?!

見事にはもった。

ってそんなことはどうでも良くて……

『ユリイチ』

「いや、好きに……」

「んじゃあ俺はソファで寝るから。」

「冷えないようにね。」

「布団あんだろ？」

「まあそれはそうかも知れど……」

心配すぎなんだよ。お前は。

すいません。

「どうかした？お前、顔真つ赤だけど……」

えっ？何？

「だから顔赤いつてどうかしたの？」

『いや、別に?』

『そう。』

そういつて私達は黙り込んでしまった。

私はこういう沈黙大嫌い。

そんなときひどい眠気が襲ってきて私はベッドで寝てしまった。

優樹 side

『おい・・・?』

って寝てるし。

そつと花菜の寝顔を覗いてみた。

可愛い・・・これは男はほつとかないよな。

って本当俺かつこ悪いな・・・なに妬いてんだろ。

でも花菜が寝返りを打った声に耐えられなくなってしまった。

可愛すぎる・・・

もう無理だよつてか俺つて相当ヤバイな・・・。

そしてとうとう緑の布団の中に入った。

でも緑は全く気付いていない。

そしてとうとう俺は抱きついてしまった。

さすがに緑は気付いたみたいで目をあけた。

そして状況がつかめてないみたい。

『何してんの?』

『えっ・・・?つと・・・』

『もしかして・・・優貴、変態?』

「いや、違う。」

「じゃあ何で同じ布団入ってんの？」

い。や。あ。の。・。・。・。

最低!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

そして緑は泣きながら部屋を飛び出していった。

「おい、緑!!!」

緑は無視して走り出してしまった。

追いかけたけどあいつ、走るの早い・・

俺は大樹に電話した。

「お前、寝込み襲おうとしたの？まだ小学生なのに・・・」

「違う!!!ただ一緒に寝たかったから・・・」

「それって同じだろう．．．」

「やつぱり？」

『もうちよつと子供な恋愛するかと思いきや早速こんな工口いことして・・・』

すいません。

『とにかく緑の場所は分かるよ。えっとね・・・外でて隣の林のそばで泣いてる。』

『詳しいな。』

『まあな。監視カメラ色々なトコについてるし。』

『そうなんだ。』

『ああお風呂にもな。』

『変態か。』

『冗談だつつうの。早く行ってやれよ。』

『おう。分かった。』

そして俺は走り出した。

緑side

なんなのよ、いきなり・・・

ビックリした。

もう大地のこと思い出しちゃった。

怖かった、あの時は。

あのときの記憶がよみがえってきちゃって優貴のことも受け入れられなかった。

『緑・・・？』

『優貴、・・・』

『ごめん!!!!!!!!!!!!いきなりで。』

『こっちこそごめんね、受け入れられなくて。』

『小学生だしまだまだ時間もあるからいいだろ。』

『うん。そうだね。ってかやる気満々?』

『まあそんなところ。』

『変態!!!!!!!!!!!!!!』

『緑だって変態じゃん。』

『優貴ほどじゃありません。』

『本当かよ。』

『本当ですよ。』

『あつ、そうですか?』

なんて他愛のない話をしていた。

『キスしてもいい?』

突然優貴が言った。

『いいけど・・・どうしたの?』

『なんか急にしなくなっただけ。』

『そう。』

優貴の顔が近くに來た。

私はちよっぴり背伸びをした。

何分もしてた。小学生だし小学生だして思ってたけど恋愛に年齢は関係ないよね・・・？

そんな幸せな私達だったけど悲劇が訪れるのだった。

優貴と同じ中学校に入ること出来て落ち着いたと思った矢先の出来事だった。

『留学することになったの』

『マジで？』

ただいま私の留学の話をしています。

まあ話せば長くなるのですが・・・

両親が語学留学しろって言ったんです。

私は医師になるために勉強しています。

それでいい経験になるってことで・・・

一年か二年。アメリカのサンフランシスコに行くことになりました。まだ中学生だって言うのに・・・

『まずいよ・・・会わなくなったらあんたたち絶対に自然消滅するよ！！！！！！！！！』

『それは分かってるんだけど・・・』

『その前に優貴が遠距離大丈夫って言うかが・・・』

『だよね・・・』

『アイツ、緑がいないと亡霊みたいになるよ。』

『それは。。。』

『そんなの見てるこっちがいやだって。』

『でも断れないし・・・』

『なら優貴もついていかせれば？』

『それこそ、無理に決まってるんじゃない！！！！！！まだ小学生だよ？』

『だよね・・・。』

『何はなしてんの？』

『あつ、優貴・・・』

綾が耳打ちをした。

『正直に言え！！！！！！』

『了解。』

『あのね・・・優貴、話があるの。』

『ん？何？いいけど・・・』

『じゃ放課後屋上で。』

『分かった。じゃあな。』

『うん。』

この放課後できちんと言おう。
そう誓った。

そして放課後・・・

『よっ！！！！』

『うん。。』

『でどうしたの？』

『あのね・・・私留学することになったの。』

『・・・』

『マジで？』

『うん。』

『緑はどうしたいの？』

『私は・・・』

『俺は遠距離は無理だ。』

『えっ・・・？』

『ごめんな。』

私は心の奥で優貴がいつていつて期待してた。
でもやっぱり無理だった。
何で期待しちゃったんだろうって後悔した。

『そっか。なら仕方ないよね。』

そういつて私は屋上から出ようとした。
でも優貴に腕をつかまれてそのまま抱きしめられた。

『でもお前がいないとダメだ。』

『えっ・・・？』

『ダメなんだよ。でも遠距離はダメだ。そばにいてくれ。』

『夢は諦めたくないの。』

『俺にはお前がどうしても必要なんだ。そばにいてくれよ。』

『ワガママ言わないでよ。私だって色々あるの。叶えたい夢もあるの。』

『そっか。じゃ別れるしかないか・・・』

『うん。そうだね。』

『まあ俺たちなら大丈夫だ。運命の相手ならまた会えるさ。』

『そうだね。』

『だからさようならは言わないよ。思いっきりがんばって来いよ。』

『うん。ありがとう。』

そういつて私達は別れた。

遠距離なんて無理ってこと分かってた。

別れるのも本当は辛かった。

でも今はがんばらなきゃいけない。

そう思って私はアメリカへと旅立った。

10年後

私は23歳になった。

無事大学も出れそうだった。

ここまで私は死に物狂いでがんばってきた。

その結果、立派な医師になれそうだったのだ。

私は優貴と別れた後、アメリカで2年学んで日本に戻り、私立中に入って猛勉強した。

もうこの頃には優貴のことなどすっかり忘れていた。

そして24歳になって大学を卒業した。。。

そして医師の試験には……

見事合格した。

そして私はまた優貴との運命的な出会いをすることになった。。

『ここが今日から働く病院か……』

ウキウキしながら病院に入ってしまった。

私が入ったのは……神経内科。大変そうです。。

『今日からよろしく願います!!!!!!』

『うん、今日から早速あなた専用の患者さんがいるのでよろしくお願いますね。』

『はい。分かりました。』

『あなたは看護師ではなく医師なのですから責任持ってがんばってくださいね。』

『はい。』

私は一人目の病室に入っていった。

『失礼します。』

『はい。』

『あなたが・・・井上優貴さん・・・?』

『緑・・・』

『えっ・・・?』

『俺だよ、覚えてないのか?』

『優貴・・・』

『やっと会えたな。』

『どうして？』

『まあ本当に運命の相手だったってことじゃん。』

『えっ？そうなるの？』

『うん。そうなるの。』

『優貴・・・』

『ん？』

『会いたかった。。。』

『俺も・・・』

本当に二人は運命の相手なのかもしれない。
こんな運命信じていいのだろうか・・・？

『それで優貴の病気って・・・？』

『ああゝなんか手の神経がやられてるみたい。』

『そうなんだ。』

『そういえばお前の将来の夢って医師だったの？』

『うん。そう。ずっとずっと。』

『あの時はワガママ言ってごめんな。』

『いいの、私も言い過ぎた。あの時すごく後悔した。』

『俺も。。』

そういつて優貴が顔を近づけてきた。。

『ストップ。。』

『えっ?』

『勤務中なのでまた今度。』

『了解♪』

『では失礼します。』

『はい!!!がんばってください。』

『はい。』

私は優貴に会えて嬉しかった。

ただ嬉しくてたまらなかった。

運命ってすごいな。ってちよつと驚いてしまった。

でもやっぱり嬉しさが何よりも・・・

幸せがまた巡ってきたのだった。

でもやっぱり幸せは長くは続かなかった。

それでも今だけはいや、今から五年くらいは幸せだったのだと思う。

『具合はどう？』

『まあ大丈夫。』

『リハビリしないとまた神経鈍るからね？』

『はいはい、分かりましたよ。お医者さん。』

『優貴、アンタ絶対バカにしてるでしょ？』

『何が？』

『ひどくいくらなんでも彼女にそんなこというなんてひどいんじゃないの？』

『そうですね。すいませんでした。』

『分かったならよろしい。』

『なんだよ、そのえらそうな態度は（笑）』

『えへへっ』

私は少しだけ微笑んで優貴のリハビリを手伝った。

優貴 side

緑がそばにいる。

そばにいてまたあの笑顔を俺に向けてくれる。
俺は緑を忘れた日なんて一日すらなかった。

ずっと合えるって信じて待ってた。

そしたら本当に運命的に縁と出会えた。

俺に怪我をさせてくれた神様に感謝をしなきゃいけないなと思った。

『リハビリがんばりなね?』

そういつて微笑む彼女に懐かしみと愛おしさを感じた。

そしてまた俺たちはどちらかが告白とかではなく自然に彼氏、彼女という関係に戻っていった。それが何より嬉しかった。

ずっとそばにいるからな、俺だって本気になって勉強してずっと縁のそばで仕事できるようになってやる。

そう思ってから優貴は医師になるための勉強を始めた。

『入るよ』

『おう。』

『どう?具合は...って勉強してんの?』

『まあな。』

『何の勉強?教えてあげようか?私理数系得意だし。』

『じゃーいい。』

『ここは...って医師資格取るの?』

『うん。取りたい。』

『またなんでいきなり...』

『いきなりなんかじゃないよ。緑と同じ場所で働きたい。』

『そっか。。。なら応援する！！！！力になるね』

『まあ医師がいたら結構心強いな。』

『でしょ？』

『でも能力は俺のほうが断然上。』

『そんなことないです〜私のほうが頭いいです〜』

『自慢するなよ〜・・医師のクセに大人気ないぞ。』

『病人に言われても説得力ありません〜ん。』

『でもマジで受かるよ？俺、緑のためなら何でもするから。』

『勤務中なのに変なこと言わないでよ、恥ずかしいから・・・』

『その顔で勤務するの？』

『それは・・・』

『顔真っ赤だし。熱でもあるの？』

『失礼します！！！！』

緑は病室を飛び出した。

そんな緑を追いかけてもせず黙々と問題集をやり続けた。

俺はすごくがんばった。

リハビリだって緑の言うとおりにより続けた。

そのおかげでなんとか良くなっていき、成績も上がっていった。

緑も勉強を教えてくれた。

それがとても自信になった。

そして試験当日、

プルプルプル・・・

ディスプレイを確認。
電話だ。

誰からだ・・・？

『緑・・・？』

緑からの電話が来て慌てて電話に出た。

『もしもし優貴？今日だよね？試験。』

『そうだけど・・・』

『まずね落ち着いて。それから最後の問題が必ず難しいんだから。
気をつけてね。』

『了解。』

『じゃあね。』

『おう。』

俺は電話を切った。

『おしつ！！！！受かってやろうじゃねえか！！！！』

俺は気合いを入れた。

最愛の人と一緒にいるために・・・
必死でがんばってきたのだから。
受からないと意味がないのだ。

俺は会場に入った。

張り詰めた空気の中試験がスタートした。

俺は全力を尽くした。

もう言い残すことはない。

とにかく受かっていればいい。

緑の同じ病院では働くことが出来るなら。。。。

それでいいって思った。

それだけでいいって思った。

『おう、緑？』

『うん。』

『今、平気か？』

『うん。今、休憩時間だから大丈夫。』

『そうか。』

『そっちはもう終わった？』

『終わったから電話してるんだよ。』

『あつ、そっか。』

『本当、俺が試験中に電話すると思うか？』

『そっだよね。』

『それより今日仕事終わったら会える？』

『会えるけど・・・何で？』

『言いたいことがあるんだよね。』

『そっか。まあ今日は8時には上げれるよ。大丈夫。』

『じゃあ8時に病院の下で待ってる。』

『うん。分かった。』

そして電話を切った。
今日言うんだ。

医師になれたら結婚してくれて。
もう25になる。

そろそろいいんじゃないかと思う。
確かに緑はかなり大変になると思う。
でも俺は緑を助けるつもりでこうして言うんだ。

少しでも力にもなりたいから。
付き合ってたかなりたつから。

そして運命の時間・・・8時。
俺は待ってた。
そしたら緑が出てきた。

『おまたせ。』

久しぶりに見た緑の私服姿には目を奪われた。
綺麗な美脚、スタイルも顔も綺麗だ。
少し会ってないだけでこんなに人って変わるんだなと思った。

『どうかした?』

『ううん。別に?』

『あつ、もしかして見とれてた?』

『バカッ!ちがうつつの。』

『あつ、そうですか』

本当はその通りなのに素直になれない俺。
バカみたいだな。・・・。

『行こっか?』

『おう。』

そして俺たちは近くの喫茶店に行った。

しばらく沈黙が続いた。

沈黙を破ったのは・・・緑だった。

『いきなりどうしたの?』

緑はすぐに話題を切り出した。

確かに緑は沈黙が小さい頃から大の苦手だったのだと思い出した。

『うん。そのことなんだけど・・・』

『別れ話?』

『んな訳ないつつうの。』

『そう。なら良かった。』

『あのさ・・・』

『うん。』

『結婚・・・しないか？』

『えっ・・・？』

『俺さ、受験が終わったと言おうと思ってたんだ。ダメか？』

『ごめん。私今は出来ない。』

『・・・そっか。』

『私ね・・・まだ一人前の医者じゃない。』

『うん。』

『だからまた留学することになっちゃったんだ。』

『そっか。』

『私が帰ってきたら結婚しよう？私が一人前になったら・・・』

『分かった。待ってる。』

『うん。ありがとう』

緑side

実は留学は嘘。

アメリカ行きは決まってるんだけど・・・

私は両親からお見合いをしろと言われたのだ。

私が拒否つても無駄だった。

だから・・・けりをどうしてもつけたかった。

でも今の私には無力だった。

その人と結婚するということになってしまったのだった。

私は悲しくてたまらなかった。

私は優貴と結婚したかった。

ずっと一緒にいたかった。

でも私にはそれすら出来なかった。

そして優貴に嘘をついて他の人と結婚するのだ。

『私って最低かもなあ・・・』

いや、その通りだった。

その罪悪感を抱え私はアメリカへと旅立ったのだった。

優貴side

はぁ・・・やっぱり無理か・・・。

何やってんだろう。

緑がいつて言うわけないよな。
立派な医師目指してがんばってたのにこんなに浮かれてて・・・
俺ってバカだな・・・

あの後、試験は合格。

緑と同じ病院には入れたものの緑がいらないんじゃない意味ないよ・・・
でも待とう。
緑の帰りを。。。

2年後・・・

まだ緑は帰ってこない・・・
何でだ・・・？
俺たち別れてないよな・・・？
そんな時だった。
1通の手紙が届いた。
中身はこう書かれていた。

『井上優貴様　私、遠藤卓也と錦戸緑は結婚いたします。まだ結婚式は挙げておりません。ぜひ来て下さい。お待ちしております。
場所は・・・かくかくしかじか。』

『なんだよこれ・・・』
俺は驚いた。緑と・・・訳分からん男が結婚か？

なんだよそれ。絶対認めねえよ。

緑は俺と結婚するんだ。

きつと親の強制だろう。

じゃないと緑が嘘をつくわけねえよ。

親のためなら。。。。って緑だ。

きつとそうだ。

俺は結婚式場の行う・・・ハワイへと旅立った。

緑side

ついにここまで来てしまった。

何やってるんだろう、私は・・・

『緑ちゃん』とうとう結婚だね。』

このキモい奴は大富豪の息子遠藤卓也というそうだ。

今日始めて会ったのに明日結婚なんて最悪・・・

しかも顔も性格も最悪だし・・・

正直いやだった。

でも私のお母さんもお父さんも喜んでたからいいや・・・

そう思ってた。

その時・・・

ピンポン・・・

『あつ、私出てきます。』

『はい・・・』

『よっ！！！！！』

『優貴！！何でここに？』

『招待状もらったから？』

『結婚式明日。』

『ああゝ忘れてた。』

『忘れてたじゃないでしょ？』

『それより・・・結婚ってどういうことだよ。』

『何で？』

『どうせ親の強制でだろ？』

『何でそう言い切れるの？』

『俺はお前を何年間見てきたと思ってるんだよ。』

『10年間ぐらい？』

『とにかく！！！！俺は認めないからな！！！！！！』

『私は好きだから結婚するの。悪い？』

『えっ・・・』

『遠藤卓也さんが好きだから結婚するの。関係ある？』

『そうなのか。。。ごめんな。』

『分かったならいいの。じゃあ。』

私はドアを閉めた。

また嘘をついてしまった。

何やってんだろ・・・

あんなに悲しそうな優貴、初めてみた。。

強制？当たり前よ。

性格も最悪じゃない。

私は家を飛び出した。

そして親の元へと走った。

優貴 side

『こんにちは。井上優貴です。お嬢さんのことで伺いました。』

『それで・・・なんだね？』

『正直に申し上げます。彼女と遠藤卓也さんの結婚は強制ですよね？』

『そうだ。』

『彼女はいいと申し上げてるのですか？』

『ああ。。。』

『なぜ分かるのですか？』

『本人の意味だからに決まってるだろう！！！！』

『それは本当ですか？』

『しつこいな、君も。当たり前だろう！！！！いい加減にしてくれないか！！！！』

『あなた、もうやめましょう！！！！』

突然、緑のお母さんが声を張り上げた。

『私達の家計が苦しいから緑には玉の輿に乗ってもらおうと思っていました。でも間違いだったのかもしれない。もしかしたら緑はいやだったのかもしれないね。』

『そんなはずないだろう！！！！』

『そんなの分からないじゃないですか！！！もしかしたら嫌がつているのかもしれないよ？』

『お母さん……』

『緑……？』

俺が振り向くと……

緑がいた。

『お母さん、ごめんね？私、やっぱり卓也さんとは結婚できない。私は・・・ここにいる優貴・・・井上優貴さんが好きなんです。』

『何となく分かっていましたよ。』

『えっ？』

『ここまで私の緑を心配してきてくれたんですよ？彼氏かな？なんて思っていました。』

『そうなんですか。』

『ゴホン・・・』

『お父さん、ごめんなさい。』

『緑、好きにきなさい。自分が幸せになれる人と結婚しなさい。』

『はい。分かりました。』

そして緑の結婚事件は終わった。
その後遠藤たちとも関わることもなくなったようだ。

俺は緑と悠々と日本に戻った。
両親も一緒に・・・

緑 side

そして私達は元の関係に戻れた。
正直許してくれなかつたけどすぐに許してくれた。
でもそれから結婚の話は一切しなかつた。
まだしなくてもいいと思ってたわけでもない。
なぜか結婚がおぞましいものだと思ってしまったのだった。
私は何となく分かるんだ。優貴の気持ち。
遠藤さんとの結婚のことで勝手に突っ走っちゃって私の両親に合わせる顔がないのからかもって。
私は気にしなくてもいいのに・・・って思ってるんだけど。。

優貴 side

俺は…なんで結婚の話で緑とすることが出来ないのだろう。
やっぱり緑の両親には悪いことしたよな。
でもやっぱり俺だって緑と同じ病院にこうして入れて一緒に働いて
いる。
そして二人でがんばっていける。
そう思ってた。
でもやっぱりそう甘くはなかつたんだ。
この時、運命と命の歯車は壊れようとしていた。。。。

緑
Side

私は病院に向かった。

緊急患者で人が足りないといふ……

私は急いで走って向かっていった。

その時……

「私のボール……！！！！！！！！」

と一人の小さな女の子が道路を飛び出した。

私は一瞬で慌てて道路に飛び出し女の子を守った。

「ガンッ!!!!!!!!!!!!!!」

一瞬宙に浮いた感じがした。

「大丈夫ですか!!!!!!」

慌ててたくさんの方が見に来た。

そこまでは何となく分かった。

女の子は… ♪ ママ!!! ボール ♪

そう元気に笑ってた。

「ありがとうございました。うちの子を助けてくれて…」

お母さんが泣ぐんでいるのが見えた。

そして私は最愛の人の顔を見ることが出来ず…天国へと旅立った。

優貴 side

今病院から電話が来た。

『緑さんがお亡くなりになりました。』

俺はとにかく病室へと急いだ。

『井上優貴様ですか？』

『あつ、はい。緑は…』

『緑さんなら地下に…』

俺は医者の後をついていった。
ドアを開けると…

緑が寝ていた。

俺は…緑の顔をなでた。

『緑…』

そういつても返事はしてくれなかった。

『おい。目覚ませよ！！！！また笑って優貴って言うてくれよ！！！！結婚するって言ったじゃないかよ。何でだよ…』

俺はその後言葉も出ずただただ泣いていた。

『ごめんなさい、緑が…』

緑のお母さんも泣いていた。

『すまん。』

緑のお父さんも涙をこらえて言っていた。

そして俺は家に帰った。

そして日記を取り出した。

そこには俺が緑とであった頃から書いていたことがすべて書いてあり今日で15冊目だ。

『3月20日 今日には緑が永遠の眠りについた日。俺は今まで緑のことを忘れたことが一度もなかった。頭の中は緑だらけで頭が混乱しそうだった。医師になつたのも緑が…ただその感情だけで生きてきた。緑の無我夢中で生きてきた。でも今緑がいなくなって悲しみと言うより絶望感でいっぱいだ。でも緑はすごい。子供を助けるために…その立派さにはいつも惹かれていた。人の最期には様々なことがあるけれど緑の最期は世界で一番立派だったと思った。』

そして空を見上げた。

そしてつぶやいた。

『緑…君と過ごした日々は宝物だったよ。愛していたよ。俺に最高の幸せをくれてありがとう。』

そういつて写真に写った緑にそつとキスをした。

それは世界で一番幸せなキスだった。。。

―完―

（後書き）

最期まで呼んでくれてありがとうございました。

正直初めての投稿なので日本語になってなかったり、誤字、脱字があっただけかもしれません。

でもそこは大目に見てください。

お願いします。

そしてこれからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0970e/>

君と過ごした日々

2010年12月18日14時21分発行